



写真 2009年2月28日 [教育の情報化セミナー] 金沢星稜大学にて

題字・デザイン 吉田貞介氏

石川県教育工学研究会

2009.8.12

第77号

教育工学の原点としてのID理論

金沢星稜大学人間科学部 岡部昌樹

我が国においては、『教育工学』の明確な定義が存在しない。概ね情報科学を基礎とする教授工学、システム工学を基礎とする教授管理、学習心理学を基盤とする教授理論が分野を形成し、対象（学習課程）、手段（情報手段）、目的（教育・授業改善）、方法（教育設計・教育方法）の視点から研究領域を示しているに過ぎない。

しかし、アメリカにおける教育工学の定義はシンプルでわかりやすい。「Instructional technology is the theory and practice of design, development, utilization, management and evaluation of processes and resources for learning.」(Seels & Richey, 1994)。「processes and resources for learning.」とは、学習成果を上げるための一連の手続きや活動(過程、それを支えるすべての材料(資源)だと捉えている。プロセスには、搬送システム、教授タイプ、授業モデル、教材開発モデルなどが含まれることになる。リソースは、支援システムや教材等、

学習環境を含む広範な概念を示し、学習指導に用いられる教材や教具のみならず、人的資源、予算、設備などの利用可能なもの全てを包含していると考えられる。この定義の最後につけられている「for learning」によって、教授は手段であり、目標とするのは知識・技能、態度などの変化として根拠づけられる学習の成果であるとの立場が強調されている。目的はあくまでも、学習を成立させることにある。

この日米の違いは、どこに起因しているのだろうか。少なくともアメリカの教育工学が明快なのは、分析 (Analysis)、設計 (Design)、開発 (Development)、実施 (Implementation)、評価 (Evaluation) で構成されるID理論 (ADDIEモデル) に裏付けられていることによるのではないだろうか。

近年、我が国でもID理論を紹介する書籍が多く出版されるようになってきた。原点に立ち返って『教育工学』を考えてみたいものです。

「教育の情報化」実践セミナー2009（報告）

金沢星稜大学 岡部昌樹

1. 開催経緯

日本教育工学協会は、山西潤一（会長）の強いリーダーシップの下、地方での産学官連携事業を推進しています。本セミナーは北陸地区を担当している中川一史理事（放送大学）が全体のコーディネートを担当、石川県教育工学研究会が中心となり、金沢星稜大学総合研究所とタイアップして、「教育の情報化」実践セミナー2009を2月28日・金沢星稜大学ハイビジョン遠隔送受信教室で開催しました。

2. 趣旨

「教育の情報化」が進展するには、すぐれたICT機器や教育システム、良質のデジタルコンテンツが学校現場に提供される必要があります。既に、いくつかのそうした機器・システムやコンテンツを用いたすぐれた実践が誕生しています。このセミナーでは、「教育の情報化」の実践動向を知るとともに、その発展を支えるICT機器や教育システム、デジタルコンテンツの活用事例を産学官共同で共有し、今後を展望します。



3. 基調講演

山西会長は、「学校と企業が共に取り組む教育の情報化」と題し、ICT環境と学校現場の問題解決策として学校と企業の関係の重要性を力説されました。

4. 事例報告

加藤隆弘（金沢大学）の司会・進行で、以下の4件の発表と質疑応答が行われました。

①「英語教育とスマートボード」

東京都墨田区立文花中学校校長 渡部 昭
日本スマートテクノロジーズ株式会社 針生文樹

【発表要旨】

CEC（コンピュータ教育開発センター）やJAPET（日本教育工学振興会）の職員が校内研修に参加することで、授業改善のツールとして電子黒板が全教員に認知されました。また、電子黒板の活用前後では、ICTを効果的に活用することで、指導力や生徒のプレゼンテーション力が着実に向上しました。



②「インテリジェントプロジェクトの教育現場での活用メリット」

横浜市立高田小学校 佐藤幸江
日本アビオニクス販売株式会社 竹本 聡

【発表要旨】

「思考したことを表現する」・「表現したことから思考を深める」という表現と思考を関連づけるツールとしてインテリジェントプロジェクトを位置付けて設計・実践しています。その結果、学習者にとって表現することの抵抗感がなくなり、自主的に学習に関わり、教えあい・学びあう姿勢が生まれました。教師にとっても、学習者がつまづきそうな場面でのようにICTを活用するかを考えるようになり、学習者の思考をより連続させることに留意するようになりました。



③「実感を伴った理解」をめざす理科授業－理科ねっとわーくの活用を通して－

七尾市立徳田小学校 岩崎京子
独立行政法人 科学技術振興機構 平田孝雄

【発表要旨】

調べ学習や実験・観察はもちろん重視しなければなりません。しかし、直接体験できないものや瞬間の事象が捉えにくい場合もあります。このような場面で「理科ねっとわーく」(JST)のデジタルコンテンツを活用して、実生活につなげて考えたり、イメージ化をさせたりすることで、思考の深化・拡散に努めました。



④「国語デジタル教科書」の授業実践から－意図を明確にしたコンテンツの活用法－

金沢市立犀川小学校 西田素子
光村図書出版 松岡正己

【発表要旨】

「国語デジタル教科書」には、教科書の本文・挿絵の拡大機能や辞書機能、参照ウィンドウによる資料・画像利用、書き込等、多様な機能があります。効果的に活用すれば授業設計・実践の自由度を高めることができます。この機能を使って、特に学習者参加型の授業へと変えることができ、思考の先読みができるようになりました。



5. 企業展示と意見交換



6. 総括パネル

村井万寿夫(金沢星稜大学)がコーディネーターをつとめ、八崎和美(金沢大学附属小学校)清水和久(石川県教育センター)、岡部昌樹(金沢星稜大学/JAET 理事)の3名によって総括パネルを行いました。



パネルディスカッションでは、メディアの位相に鑑み、機能の特性次元に終始するのではなく、記号次元(文字・画像・音声)の特性とその活用意図や効果にまで踏み込む必要性が指摘されました。

今年度の教育工学研究会の活動の方向性

事務局 清水和久

1. 現状

石川県教育工学の活動は拡大時期と停滞時期があるように思われる。学習指導要領が変わるなど大きな変化の時期にはセミナーなどが開かれ活発化する、最近の事例ではPISA型読解力に関心が集まり、金沢大学のセンターセミナーとも共催で何度か夏に研究会が開催された時が思い出される。また、その前は総合的な学習の導入の時期で情報活用能力が盛んに言われたときだったように思う。ここ数年の関心事は新指導要領の実施に臨み、教科における活用力であるように思う。「新指導要領に対応した」とか「活用力をつける授業」と銘打つと集客力がアップする。確かにその場その場で教師が求めている情報をタイムリーに提供していくことは重要なことである。しかし、これがなかなか組織の拡大にはなかなかつながっていない。

2. 教育工学的研究の意義

教育工学研究会という響きは教科の研究会と違いその内容がイメージしにくい。一般には情報機器の活用のみを扱う研究会という誤解を受けやすい。授業設計を考えていく上にももちろん有効であれば、それらの機器を活用することもあるが、基本的には授業設計なのである。

研究会のメンバーがベースとする教科が異なると、なかなか表面的には意見の深まりがおきにくい。しかし、表面上のテクニックや教材の教え方ではなく、もっと深いところでのカリキュラムとしての考え方や評価方法の意義などについては十分討議することができる。教科上の研究は、相撲で言うと土俵上での技の研究であり、教育工学は土俵そのものの形状や力士の試合前の意識、力士を支える観客の応援の動向なども含めたもっと大きな視点で見ることが出来る学問であると思う。教科の研究を極めていくとその先生なりの授業スタイルができあがる。しかし、自分の指導法が通らない子どもに出会ったとき

に、自分の指導法が悪いのではなく子どもが悪いのだという錯覚に陥りやすい。水泳の金メダリストを2人も育てた平井コーチの著書「見抜く力を叶えるコーチング」では、性格の異なる北島康介選手と中村礼子選手を全く別々の方法で指導している。つまり1つの方法で成功したからと言ってその方法を他の人にも同様に当てはめようとしないのである。

教育工学的手法は大きな視点から見ることで、学ぶ意義を捉え直したり、授業設計の手法そのものを見直すことによって自分の指導法に新しいスパイスを取り入れたりすることができる方法である。大きな視野で授業設計を考えていくことで絶えず新しい状況に対応していけると考えている。つまり教科としての専門的視点と教育工学的視点の2つが必要であると考えている。

3. 組織拡大の必要性

組織拡大をおこなわないで現状維持を行っている組織はだんだんと縮小していく。それはメンバーの高齢化と共に実際に授業ができる実践者がいなくなっていくことに原因がある。将来性のある組織は若い実践者を多く抱える組織である。

自分の学校にいる若い先生方にぜひ声をかけていただきたい。またその先生に来ていただけるような魅力的な学習会、及び教育工学会のメンバー自身の魅力的な実践の紹介、同僚が授業の展開などに悩んでいたらさりげなくできるアドバイスのスキルなどを鍛えていきたいものである。その様な前提の中でぜひ最後の一押しをして組織への加入を勧めていただきたい。

組織拡大の方向性として今年度は学習会を充実させようと思っている。白山支部では学習会のオープン化、金沢支部では若手の先生を中心とした学習会も企画されている。(7月31日星稜大学にて)積極的に興味のある方にお声かけをお願いしたい。

研究部の取組み

研究部 細川都司恵

はじめに

研究部では、今年も一人一人の「指導力向上」がこれからの子ども達の「確かな学力」につながると考え、各支部の学習会を充実させることで、指導力を高め合う取組みを進めていきます。

私たちが今、しっかり方向を見定めなければならないのはまずは「新学習指導要領」です。今年度から一部の教科で先行実施となりましたが、今回の改訂の背景には、OECDのPISA調査の結果が色濃く反映されていることはご存じの通りです。

PISA 調査の参加国数の推移

| 調査年 | 参加国 | 参加生徒数 |
|------|-------|------------|
| 2000 | 32カ国 | 約26万5,000人 |
| 2003 | 41カ国 | 約27万5,000人 |
| 2006 | 56カ国 | 約40万人 |
| 2009 | (?)カ国 | (?)万人 |

日本の順位

| 調査年 | 数学 | 読解力 | 科学 | 問題解決 |
|------|-----|-----|-----|------|
| 2000 | 1 | 8 | 2 | |
| 2003 | 6 | 14 | 2 | 4 |
| 2006 | 10 | 15 | 6 | |
| 2009 | (?) | (?) | (?) | |

*文部科学省 HP をもとに作成

研究部では、前部長の中條敏江先生の時に、夏、「読解力セミナー」を開催し、「確かな学力」の方向性を見据え実践研究を進めてきました。

それが、今、新学習指導要領という形となって具体的に学習に取り組むための方針が示されました。私たちは、完全実施を目前に「新学習指導要領」を的確に理解し授業実践に移さなければなりません。

また、近年教職員の大量退職にともなう新規採用職員の増加が教育現場の変化をもたらしています。若く、活力がある反面、指導力については発展途上です。彼らの「授業が上手くなり

たい」という思いを受けた学習の機会を、研究部でも提供したいと考えています。

平成10年に初めて登場した「総合的な学習の時間」は、今回の改訂で育てたい力が例示され、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な活動を行うことがより明確にされました。

金沢市では、ESD（：持続発展教育…持続可能な社会を実現していくための価値観、態度(知恵、生き方)を含む意識改革のための教育)を視野に入れたユネスコスクールの展開を図っていますが、今回の改訂にも合致した取組みであり、今後、その充実が期待されています。

このような状況の中、今年度、各支部ではそれぞれの課題や特色を生かして、次のような学習会を担当します。支部の垣根を越えて相互に交流しようということで会の運営も進めていきます。

○6月 白山支部

新教科書づくりについて、光村図書の編集者からお話をお聞きする。

○7月 若手グループの学習会

「アップとルーズで伝える」のスライドショー作りから学ぶ協同学習の肝～活用型授業を視野に入れて

○8月 D-project との共同企画

新学習指導要領を視野に入れた活用型授業～メディアで創造する力の育成を通して～

○10月 金沢支部

アートマイルプロジェクトを中心とした国際理解教育の授業実践の報告・協議

なお河北支部は、再度結成の予定、能登支部も活動を継続していきます。

今年度の学習会も実りの多いものになることを願って、各支部協力して進めていきます。皆さんご理解・ご支援お願いいたします。

平成21年度 白山支部活動「習得と活用」

白山市立湊小学校 中條 敏江

1. はじめに

白山支部での活動は、大きく2つあり、一つは毎月一回の定例学習会であり、もう一つはメーリングリストでの情報交換である。

白山支部が立ち上がってから、10年以上たつが、毎年3月にメーリングリストも一度リセットし、3月末に部員を募り4月から意思新たに活動を開始している。

2. 定例学習会

これまで、4年ほどPISA型読解力を中心に学習や指導案検討を行ってきた。PISA型読解力を下敷きとした新学習指導要領が形になってからは、新学習指導要領をもとにした学習を進めてきている。

昨年度より、「基礎的な知識・技能の習得」と「知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力の育成」における授業設計や学校としての取り組みを探っている。しかし、習得や活用に関する書物を読んだり、指導案や取り組みを検討したりしても、部員だけの活動に限界を感じていた。特に、各教科の専門性について知識が不足しているのが課題となっていた。また、新学習指導要領の具体的な改善内容の「言語の力の育成」としては、国語科を中心として全ての教科での取り組みが期待されている。

そこで、今年度は、学習内容を習得と活用を中心とし、多教科にわたり外部講師を招いた学習会を設定することとした。外部講師を招くとすると、部員だけ聞くのが惜しく、5月6月と石川県教育工学会との共催とし、他支部の工学会の部員や同僚、毎年会場をお借りしている金沢市立額小学校（石川県国語研究大会会場校）のみなさんなど、多数の方に参加していただいている。

学習会では、外部講師の講義は7時から1時間ないし1時間半で終了し、その後は、部員だけでその日の講義を深め、その他指導案検討や課題となっている情報交換をしている。

<平成21年度 白山支部 学習会計画>

| | | |
|-----|--------------|-----------------|
| 4月 | 今年度の支部活動の計画 | |
| 5月 | 国語科 | 前金沢市指導主事 高木欣子先生 |
| 6月 | 国語科 | 光村図書出版 飯田順子編集長 |
| 7月 | 学校図書館 | 坪内・中條部員 |
| 8月 | 社会科 | 県社研会長 岩田修一先生 |
| 9月 | 国語科 | 犀川小 西田素子部員 |
| 10月 | メディア | 星陵大学 岡部昌樹教授 |
| 11月 | 国語科 | 県国研報告 研究主任 正来部員 |
| 12月 | 教育工学 | 星陵大学 村井万寿夫教授 |
| 1月 | 算数科 | 金沢算数研 高橋ひろ美先生 |
| 2月 | 未定 | |
| 3月 | 今年度の支部活動のまとめ | |

3. メーリングリストでの情報交換

メーリングリストは、学習会などの案内以外にも、情報交換をしている。

7月までの情報交換として大きなものに、3年の社会科の交流学习がある。3年生の社会科を担当する部員3名が、白山市のそれぞれ特徴的な地域の学校に勤務している。1学期の「市のようす」では、8号線のそばの東明小学校、田に囲まれている広陽小学校、手取川河口の湊小学校、そして山麓の鳥越小学校を交えた4校で、それぞれの地域の様子を文章と画像、地図を送りあった。受け取った学校では、担当する学校のグループの子供たちが、クラス内で発表しあい、白山市全体を把握することができた。

メーリングリストでは、交流学习での打ち合わせとともに、この単元での「習得と活用」について、具体的に討議しあうことができた。

4. 終わりに

今年度の白山支部は、たくさんの方のご協力を得ての学びになる。学習会の講師の先生方、参加を呼びかけてくださる先生方、よろしくお願いたします。

今年度の金沢支部の活動

石川県教育センター 清水和久

1. はじめに

金沢支部では今年度は国際交流の実践をメインに活動をおこなっています。国際交流では、日本の子ども達と同世代の海外の子ども達と一緒に協働学習をおこないます。そしてなにがしかの目に見える成果物を作ることをゴールとしています。一般に国際交流というと、敷居が高いと思われるがちですが、活動のゴールを明確にし、国際交流自体をクラスのねらいを達成するための「手段」と考えることによって、どのクラスにもあてはまる自律的な活動を仕組むことができると考えています。

2. 活動の内容

取り組む活動は、過去の経験から児童の満足度が高かった「アートマイルプロジェクト」(交流校同志で1枚の大きな絵を仕上げる活動)や「テディベアプロジェクト」(ぬいぐるみを交換し、互いの国の生活の様子を日記にして伝える活動)です。

月1回程度研究会を持ち、互いの国際交流プロジェクトの進捗具合を報告すると共に、実際の国際交流の前にその練習として国内の児童同志の交流も行おうと思っています。

<国際交流の4段階>

第1段階(9月10日)自己紹介や学校紹介

第2段階(10月11日)テーマ構図

第3段階(12月1日)具体物の作成。

第4段階(2月3日)鑑賞と振り返り。

この4つの段階に合わせて研究会の活動も進めていく予定です。

3. これまでの活動

7月現在においては各校とも交流相手が具体的に決まっていないのですが、9月から交流が始められるように、自己紹介の英語での練習や発信できる情報の蓄積を行っています。以下これまで行った3回分の学習会について述べます。

○第1回学習会 6月2日(火)

アートマイルプロジェクト及びテディベア

プロジェクトに興味がある先生方を迎えてのキックオフ会。国際交流の導入授業などのプレゼンバックを紹介し、国際交流の意義についての説明を行う。最終的なねらいとしては、交流を通して、コミュニケーションツールとしての英語の必要性や、協働学習を通しての共に作り上げることの喜びや達成感を子ども達に感じてもらうことであることを紹介することができた。

○第2回学習会 6月30日(火)

テレビ会議(Skypeを使用)の練習。PCへのインストール方法や会話練習を行う。実際に台湾の先生とTV会議を行い、台湾と交流予定の学校は9月以降の交流の計画を英語で行った。

英語を使ったTV会議となると緊張するが、実際に体験することで子どもの気持ちになって考えることができた。

○第3回学習会 7月12日(日)



昨年度フィジーでアートマイルプロジェクトを行ったJICAのボランティア調整員であった高

橋美保さん(本誌会報77号にも寄稿されている)の講演会の実施。彼女はザンビアでも海外青年協力隊で活躍しており、ザンビアでの様子や、文化の違いなどから最終的には生きる意味についても話していただいた。

4. まとめ

今年度の金沢支部の活動の特徴は、実際に国際交流(アートマイルプロジェクト等)という共通の土俵にのりながら、学習会で理論を学びそれぞれのクラスに応じたカリキュラムの進め方の中で、お互いの情報を交換しながら、悩みや解決方法を共有化していけるところだと考えます。

「20年会」(2008年度採用者の学習会)の取り組みについて

金沢市立小坂小学校 小林 祐紀

1. 「20年会」とは

「20年会」とは、2008年10月より実施している、2008年度に採用された若手教師の学習会である。

会の名前の由来は、1)平成20年度に採用された教師たちの集まり、2)それぞれの地域でミドルリーダーとなる20年後に向けて、授業力向上を目指そう、という2点から「20年会」と名付けられた。

現在、毎月第2、第4火曜日の午後7時から2時間程度の学習会を行い、毎回10人程度が参加している。(開催場所：小坂小学校)

2. 20年会の趣旨

本会の趣旨は、以下の2点である。

1) 仲間同士のつながりを確保すること

2008年度の採用者は、近年の傾向通りに非常に多数となっている。しかし、教育現場の多忙化により、志を同じくする者が集う機会は、多くない。

そこで、悩みや思い、考えを共有できる場所づくりが必要であると考え、本会の設立趣旨の第一とした。

2) 授業力の向上

現在、声高に教師の授業力向上が叫ばれている。しかし、それ以上に若手教師たちは、自動努力によって、授業力を高めたいと切に願い、苦悩している。

そこで、他人の授業や自分自身の授業のビデオを見て、意見やアドバイスを述べたり、もらったりして授業リフレクションを行い、授業力を向上させることが必要だと考えた。

3. 活動の概略

本会は、原則として以下のようなルーチンで活動を行っている。

1回の学習会では、授業のビデオ、指導案などをもとに、メンバーによる授業報告及び、議論が行われる。

学習会の3回に1回ほどはゲストを招いて、講演、その後ゲストを交えての議論が行われる。ゲスト(以下に記す)には、ベテラン教師や企業の方、教育学研究者などに来ていただき、貴重なお話をいただいた。

八崎和美教諭(七尾市立山王小学校)

「八崎流学級づくりのポイント」

西島 壮(アップルジャパン株式会社)

「企業アップルの教育界への取り組み」

村井万寿夫(金沢星稜大学)

「2年目の実践研究のススメ」

また、学習会だけではなく、親睦を深めるためにも行っている。

4. 学習会の実際

学習会では、授業のビデオを見ながら、誰もが気づいたことを随時発言するようにしている。例えば、授業の導入について、代案を出したり、教室が騒がしいときにどのような方法で集中させるかを意見したり、気づいたときにすぐ発言している。

そうすることで、議論が拡散するおそれもあるが、それ以上に、意見が活発にやりとりされる。また、発言内容も「授業全体の展開の仕方」から「教師の指示・発問」のように授業設計論から授業技術(指導技術)に関することまで多岐にわたる。

話が集約されないこともあるが、現状では、さまざまな角度から授業を検討できることが、より重要だと考えている。

5. 今後の活動について

今後もこれまで同様の活動を続けていく予定である。

ゲストについても、ベテラン教師や教育学研究者を招き、新学習指導要領を視野に入れた教科指導や日常的にできる授業力向上の取り組み方法について、講演をしていただきたいと考えている。

河北支部の再立ち上げ

内灘町立清湖小学校 飯田 淳一

1. はじめに

河北支部の活動が停止して4年あまりが過ぎた。河北の小学校に戻ったのを期に、以前のように支部活動を再開しようと考えている。

ところがなかなか思うように進んでいない。今のところ計画の段階でしかない現状が残念である。そこで1学期をふりかえり、その原因とこれからの方策、そして内容を考えてみた。

2. 1学期をふりかえって

まずとにかく忙しく余裕がなかった。学校を異動しその学校のやり方に慣れるのに時間がかかった。しかし忙しいのはどこも同じである。そのせいにはしたくないし、してはいけないだろう。

ただ河北では、校内研究をわりと学校一丸となっていて行っている学校が多く、そのせいか研究等はそれで十分という雰囲気があったり、個人の研究があまり盛んでなかったりすることも原因の一つかもしれない。(もちろん全ての学校ではない)

また、カリキュラムに追われ、授業をこなすことで済ませていくような感じも少なからずある。(もちろんそんな感じがするというだけであって、これまた全ての学校がそうというわけではない)

このような中で、教育工学やメディアに関して興味のある人を探し、研究を深めていこうとするのは、なかなか難しいものだと思われながら感じた1学期であった。

3. 人とつながりを作るために

やはりいろんな機会をとらえ、つながりを作っていく、仲間を集めていくことが大切だ。

(1) まず校内で

校内的に機会があるごとに教育工学の紹介をしている。いろいろなメディアを使った授業や機器の紹介もしているが、まだまだ小出しである。夏季休業中に校内研修会を3回行うのでさらに広めていくつもりである。

(2) 郡市の視聴覚研究会で

河北郡市の視聴覚研究会でも、毎年8月の夏季休業中にパソコンの研修会を主催している。

この会は、各市町の代表2人ずつの計6人(小学校は3人)が集まる会で、しかも年に3回しか会合がない。つながりを作るのはこれからである。夏のパソコン研修会には一般の先生も来るので、このときにも教育工学研究会をアピールしていこうと考えている。

(3) 町の情報教育研究会で

そして内灘町の情報教育研究会である。町内の6校から1人ずつ部員が出るが、初めて顔を合わせる人ばかりだった。人のつながりを作るには、やはり時間がかかる。とにかく少しずつである。この会も夏季休業中に出前研修として研修会が3回行われるので、この機会も生かしていきたい。

4. 活動の内容について

活動の内容として2つを考えた。

(1) アートマイルプロジェクトを通して

今年度内灘町の3つの小学校がアートマイルプロジェクトに参加することがわかった。向粟崎小学校、西荒屋小学校、そして清湖小学校である。

そこでこの3校を中心にして、進捗状況などの情報交換やテレビ会議のノウハウを話し合ったり練習を行ったりすることにした。1回目の会は、昨年までの取り組みの情報交換である。

これを支部活動の柱の一つとして位置づけ定期的に集まりながら、プロジェクトに参加していない人も巻き込んでいこうと考えている。

(2) 音楽の授業のデジタル化の普及を通して

音楽の授業にIT機器を取り入れることは、あまり進んでいない。コンピュータ等を活用することによって、より効率よく授業を進めたり、児童の意欲を高めることができたりする。

この方法や活用場面を探っていくことを、もう一つの柱として、支部の活動を行っていこうと考えている。

説明的文章における習得と活用について

石川県教育センター 谷藤 真喜子

1. 説明的文章で何を学ぶか

低学年にとって、説明文の学習は身近な事物の不思議を驚きとともに学んでいくとても楽しい学習である。しかし、学年が進むにつれ、文章構成が複雑になり、また、内容は環境問題、社会問題などとなり、筆者の考えをつかみながら読み進めていくことが学習の中心になる。つまり読み手に筆者の論を読み解く思考力が求められる。その力は当然のことながら、低学年からの系統的指導によって積み上がっていかねばならない。そこで説明文で育てるものを挙げてみる。

- ① 学習者の興味・関心・意欲を高める。
- ② 内容の理解を深める。
- ③ 文章構成及び叙述法に関する知識を獲得する。
- ④ 論理的認識力・思考力を育成する。
- ⑤ 論理的な表現力を育成する。
- ⑥ 論理的な表現を支える言語能力を育成する。

今まで①と②の内容的理解中心の学習が多かったが、最近では③～⑥の形式的理解にも指導の重点が置かれるようになってきた。学習者に①～⑥を学ばせることを前提にバランスを考えながら学習を計画する必要がある。

2. 説明的文章の確かな読みの力

(1) 国語用語を大切に扱う

説明文を読み解く上で、内容をとらえていくと同時に、筆者の論理性に気付かせ、読み解き方を低学年段階から系統的に国語用語として認識させていく必要がある。そうすることでその読み解き方を次々と活かし、螺旋的・反復的に用いることで確かな読解基本能力となっていく。

(2) 学年間のつながりを大切に

学年で重点的に指導する内容はあるが、6学年のつながりを考えて、布石として前学年から、また既習の活用場面として後学年で使用する場を作っていくことも効果的である。

例 2年→3年(光村図書)

2年上「サンゴの海のいきものたち」

- 学習の最後に全体を三つに分け、それぞれの役割を知る

「初め」… 説明のもんだい でしょうか。

「中」… 問題の答えを説明

2つの例のかたまり

「終わり」… このように

3年上「ありの行列」

- 題名から

- 説明文には問題があるはず

「初め」… 説明のもんだい でしょうか。

「中」… 順番に問題を解いて言っているサンゴとはちとちがうな。

「終わり」… このようにでまとめている。

3. 習得・活用を意識した説明文の授業づくり

(1) 習得・活用を意識する

- 活用するものは
→説明の内容や方法
説明を読み解く方法(思考)

- どこで学ぶか
→教材文を読む過程で

- どこで活用するか
→次の単元で(既習として)
単元の指導過程の中で
1時間の学習の中で
他領域で他教科で

- どうやって活用するのか
→言語活動を通して

つまり、教材の特性を十分に吟味し、児童に付けたい力を獲得するための言語活動を核とした単元構想が必要である。

(2) 言語活動の充実をはかる

言語活動と言えば、とかく活動をするのが目的となりがちである。目的は付けたい力の獲得のためであることを見失わないようにしなければならない。言語活動を設定する場合は、以下の2点に留意する。

- 既習の学びをふまえて、意図的・計画的に設

定すること

○領域を超えて総合的に設定し、言語活動が関連的に行われるようにすること

(3) 単元構想のポイント

視点1 読みの目的の明確化

→教材文の特性の吟味し、単元のゴールを設定する。

視点2 基礎的・基本的な知識・技能の具体化

→学び得た知識・技能をアイテム化

視点3 さまざまなテキストを関連付けて自分の考えを持ち、伝え合う活動の重視

→PISA型読解力

(4) 単元構想例

【筆者の書きぶりを自分で「書く」に活かす】

3年「すがたをかえる大豆」光村図書

◇指導事項

中心となる語や文 段落相互の関係

◇言語活動の設定

読み取った書きぶりを活かし、「すがたをかえる○○」の本作りをする。

◇学習過程

学習のゴールの明示 視点1
必要な読みの力を得る 視点2
変身言葉アイテム 説明アイテム
自分の本作りで再構成 視点3
交流活動で評価し合う 視点2

視点1

題名のもつおもしろさから、児童は共通教材を読む前から「すがたをかえる食材」についてイメージを持たせることは可能である。そこで「おいしく食べるくふう」を読みとって、自分たちも「すがたをかえる○○」の本作りをすることを学習のゴールとする。

視点2

内容理解の点では「加工する方法を表す語句」形式理解の面では「中心となる文」や「段落の関係を分かりやすくする接続語等をアイテム化する。さらに交流活動においてもアイテムを使っているかも評価視点とする。



変身言葉アイテム
「いる」「にる」「こなに
ひく」……

視点3

学んだ変身言葉アイテムをもとに、調べる資

料から必要な情報を取り出し、共通教材の書きぶりに照らしながらまとめていく。

【筆者の考えをもとに自分の考えを深める】

6年「生き物はつながりの中に」光村図書

◇指導事項

筆者が述べている「生き物の特徴」を具体例を通して理解する

要旨について自分の考えを交流し深める

◇言語活動の設定

筆者の挙げたつながりを自分のつながりとしてネットワーク図に表す。

筆者への手紙を書く

◇学習過程

既習をもとに全文概観する 視点2
問い→答え→まとめから部分を読む
学習のゴールの明示 視点1
必要な読みの力を得る 視点3
筆者の考えと根拠となる「つながり」
書きためた考えをもとに発信活動

視点1

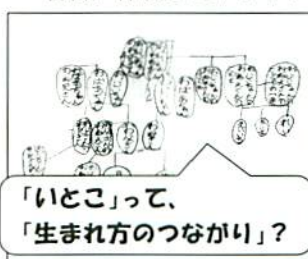
題名をもとに、今まで学習してきた「生き物のつながり」を振り返ってみる。「サンゴの海の生き物たち」での共生や総合的な学習で学んだ食物連鎖などから、つながりについての今の理解を確認し、筆者の考えをもとに、さらに深めた自分の考えを持つことを学習のゴールとする。

視点2

既習の読みの力を使い、問いの文に対してのまとめの7段落に着目する。後ろから読むことで、3つのつながりの段落2～6段落のまとまりが整理される。

視点3

各自が作成したネットワーク図を比較する際、



正しく筆者の根拠をとらえているか、また自分にはない友達の「つながり」を知り、あらためて「つながり」を捉え直してみる機会とする。

おわりに

教材の特性をつかんだ上で、指導を重点化し、児童が「使えた」「できた」「わかった」と思える言語活動を今後さらに開発していきたい。

2 回の白山支部の学習会から

金沢市立額小学校 正来 洋

1. 新学習指導要領を意識して

白山支部の月例学習会も6年目を迎えました。今年度は、いよいよ移行期間に入った「新学習指導要領」がメンバーの中に主要なテーマとして意識されてきました。

そこで今年度は、新学習指導要領の目玉の一つである「習得・活用・探求」の学習のあり方について学習を深めたいと考え、ゲスト講師を迎えて学習することにしました。

2. 高木欣子先生を迎えて

今年度の白山支部第2回目の学習会は5月26日の火曜日に額小学校を会場に行われました。ゲストとして前金沢市教育委員会の指導主事で現白山市立美川小学校教頭の高木欣子先生を迎え、「習得と活用」を意識した国語の授業作りについてミニ講演会を開催し、30名弱の参加がありました。

○「習得と活用の明確化」

これまでの指導の仕方をわかりやすくしたのが新学習指導要領であること、フロアのみなさんに納得されたところでした。「『履修』ではなく習得」とされた意図を読み取り、「教えた」だけではなくしっかり児童の身に着いたかが大切であること、だからこそ、活用の場面が必要であることがわかりました。学習場面がこれまでに比べてかなり明確に指導要領に記述されていることが示されました。だからこそ、何を習得させ、習得した姿はどう児童に現れるか、評価がより一層重要になること、習得したどれを活用させているのかを授業者は明確に意識することが大切であることがわかりました。

○教科書をもっと読もう

教科書教材の最後に書かれている「たいせつ」をもっと活用してほしいと高木先生はおっしゃっていました。たしかに教科書には大切なポイントが明示されています。授業研究の場でも教科書の内容や指導のポイントをしっかりと読み取ることの大切さを学びました。これは国語科に限らずどの教科でも言えることではありますが、授業の目標分析をきちんと行っておくことの重要性は、教育学の「授業設計」の考え方が生きる部分であると感じました。

○どんな子ども、どんな力をめざすか

国語授業で教えるということ、つい陥ってしまいがちなのが「テキストの内容」をいかに教えるかという議論、つまり内容論です。しかし、それだけでなく、「スキル」などつけたい力や態度を意識することの重要性を学びました。これについては、いわゆる「情報教育」の目指すところと一致していると感じました。教科の中に「情報教育」のスキル体系が入り込んできたということが感じられました。

○授業の45分をどう使うか

- ・さっと「課題」に入る
- ・最後の5分は必ず「ふりかえり」

「教えて」「考えさせて」「やらせてみる」という「習得と活用」を意識した授業作りのためには、教師の厳密な時間意識、明快で簡潔な指示・発問の技術、教えることと考えさせることの割り切り（最適化）が不可欠と感じました。

高木先生はこれらの内容を身振り手振りを交えて熱く語ってくださいました。参加者にその熱い思いが伝わっていたと感じました。

3. 光村図書 飯田順子さんを迎えて

白山支部の第三回目の学習会（6月19日金曜日・教育プラザ富樫にて）は、国語科の新学習指導要領のめざすものをより深く学ぶという趣旨のもと、光村図書の国語教科書の編集長である飯田順子さんを迎え、30名余りの参加者対象に講演会を行いました。

特に印象に残ったお話の抜粋です。

「活用」には三つの側面がある。

1つめは知識だけでなく、実際に活動ができる、言語活動ができること。

たとえば、手紙の型、それを使えるかどうか。言語活動ができるか。活動させることばかりが目的になっている現状を踏まえて、知識→活動を重視している。

たとえば、説明するという活動には、構成する、調べるなどの要素の知識が必要。それら知識を組み合わせる「活用」する。

2つめとして、他の教科などで使えるか。

たとえば新聞作りが次の学年での学習で同様の新聞作りがテーマを変えてできるか。繰り返しは国語の中だけでなく、他教科にも生きるかどうか。社会科・総合…今まで以上に先生が意識して活用場面を設定し、子どもに「使えた！」という意識を持たせることが必要。せっかく小学校ではほとんどの教科を持っているのだから、それを意識していけるとよい。

3つめは、他の領域に応用できるか。

話す聞くで学習したことを、読むことや書くことで活用できるか。

たとえば「はじめ・なか・おわり」は「読む・書く」で学習するが、「話す」でも当然使える力。説明文を読んだときにも、読みに利用できると子どもが気づくようにできるはず。

教科書の構成上、「やりにくさ」の原因としての「繰り返し」がある。同じ指導事項が繰り返されるが、時間的な制約のせいで、十分な習

得が図られない現状がある。だからこそ、言語活動の「くりかえし」をどのように仕組むかが重要。

たとえば「主語と述語」は学年で一度習うとそのまま高学年でも学習事項として出てこないこともある。後の学年でも「漢字の広場」などで意識させ活用する場面を作るような指導があると良い。そのように言語活動の「繰り返し」があるという意識を子どもたちに持たせると力が伸びるはず。

このほか、「習得と活用」の考え方とPISA型読解力の関連、「伝統的な言語文化」の授業の考え方、「物語文」の学習をどのように捉えるか、など、1時間という限られた時間にも関わらず、貴重な知見をちりばめつつ大変わかりやすくお話をしていただきました。

国語科の中の「習得と活用」は算数科などよりも深く「埋め込まれた」形で示されていると感じていました。飯田さんからは、次期の教科書の内容はまだ非公開で話ができないが、現行教科書よりも「習得すべき力」「活用する場面」がよりはっきりした形で示されるようになるというお話がありました。ここでも教育工学的な「授業の最適化・授業設計の重要性」を感じたり、「情報教育」がいよいよ国語の中に組み込まれていくことを実感したりすることができました。

4. 終わりに

白山支部ではこの後も「社会科」「理科」などでも新学習指導要領や「習得と活用」を意識した授業作りのためのゲスト講師を迎えた学習会を企画しています。多くの方に参加していただいて学習を深めていきたいと考えています。

教育工学の授業設計としての習得と活用について

金沢星稜大学 村井 万寿夫

1. 習得と活用の前に

授業設計の命は、何といっても目標分析（目標設定）とそれに迫るための授業のシステム化（最適化）にあると言ってもよい。本時レベルで言えば、本時のねらいの設定と学習過程（学習展開）の計画ということになる。

「習得」「活用」といったことの前に先ず、このことを再認識する必要がある。なぜなら、目標が曖昧だったりいくつもの目標が設定されていたり、あるいは、学習過程がシステム化されていなかったりする学習指導案にお目にかかることが残念ながらよくあるからである。

システム化されていない学習過程をひと口というと、教師の働きかけが不明瞭な学習過程ということである。学習指導案は教師の指導計画であるのにも関わらず、児童生徒の活動計画の如き記述されている。これでは指導にあたる教師がどのような手立てのもと授業を遂行していくのが第三者にはまったく分からない。

【コラム】

学習指導案……授業を実施する前に授業の目標や展開の筋道などを一定の書式で書き表したものの。
目標分析……学習者が学習した結果到達すべき具体的目標を行動形式の立場から書き表したものの。

2. 「習得」と「活用」の吟味

本時の授業設計がある程度成されたら、次に「習得」「活用」といった目で指導過程を眺めてみる。そして、本時における基礎的・基本的な知識・技能は何か（どこか）、そして、それをもとに思考力、判断力、あるいは表現力を高めたりする場面はどこかについて吟味してみる。

この「吟味」が重要なのは誰もが異論のないことだろう。しかし、この吟味ができるのは確かな授業設計ができた上であることについて留意する必要がある。逆に言えば、不確かな授業設計、つまり、目標分析や学習過程の計画が不

十分なままに吟味してはいけないということである。それは例えば、いくつもある山の中の一つに登頂することが目標であるのに、どの山かを定めずそのまま登山計画を立て、自己の経験や主観などをもとに曖昧な休憩地や補水地点を設定するようなものである。この“休憩地”や“補水地点”が登山者との間でミスマッチ状態になる可能性は高いと言える。「教室の授業」に置き換えて言えば、本時に指導すべき事柄と教師の思い（すなわち「活用」）との間にズレが生じることになる。

3. 転移性に期待する教育工学

学習における転移も教育工学の考え方の一つである。すなわち、ある一つの力が付いたなら、その力は当該科目のみならず他の教科の学習においても利用・発揮される。あるいは、ある一つの学習方法が身に付いたならそれは他教科における学習方法にも利用・発揮されるという立場をとるのが教育工学である。

これに立脚し、小学校のある教科の「習得」と「活用」について下記に例示するので、自己の実践したい教科に当てはめ、「転移」できるようにしてほしい。

小学校4年理科を例に

(1) 単元名

「物の温まり方」

(2) 本時のねらい

「金属の形による温まり方の違いを自分たちで考えた予想や方法に基づいて調べることができる」と設定した場合、次のような学習過程が想定される。

(3) 学習過程

- ① 学習課題を確認する。
- ② 実験に必要な用具を準備する。
- ③ 用意した金属（鉄棒・鉄板）にロウやチョコレート、バターなどを塗る。

- ④ ワークシートに金属の絵を描き、溶け方の予想を言葉や図（線やイラスト）で表す。
- ⑤ グループごとに金属を熱しながら塗った物の溶け方を観察する。
- ⑥ 実験結果をワークシートに書き込み、自分たちの予想と比べる。
- ⑦ 各グループの結果を出し合う。
- ⑧ 金属（鉄棒・鉄板）の形による温まり方についてまとめる。
- ⑨ 実験の後片付けをする。

(4) 「習得」と「活用」の場

学習過程の③～⑥が「基礎的・基本的な知識・技能」の「習得」になるであろう。言うまでもなく、理科においては、実験・観察の準備を児童自ら行ったり、仮説（予想）をもとに自ら実験して結果を導き出し考察（比較）したりすることは基礎的・基本的な資質・能力である。

一方、「活用」は⑦や⑧になるであろう。⑦の結果をもとにした話し合いは文字通り言語活動そのものと言える。また、⑧についてはいわゆる論述的な文章を書くことを目的に「理科レポート」に取り組ませることが多いだろう。

(5) 「習得」と「活用」の見極め

上述した理科の例のように本時レベルにおいて「習得」の場と「活用」の場を見極めることができる。この「見極め」は計画された学習過程がもとなる。つまり、学習過程が計画されていなければ確かな見極めはできないということである。

(6) 理科の見極めを他教科に転移

理科の例で納得（賛同）していただいたなら、そのことを自己が実践したい教科・単元の本時レベルに置き換え、本時のねらいと学習過程を顕在化させてみよう。少なくとも私が例示した理科の例の程度にまで表してみる。そして、「習得」と「活用」の場について見極めてほしい。

私がこのことに期待するのは、教師であるあなたの「学習の転移」に期待するからである。

【コラム】

学習の転移……学習の転移がうまくいくためには、新しい学習場面で必要とされる様々な刺激-反応の連合を、以前の学習でどの程度獲得しているかによる。

=補足=

これまで述べた理科の例に、下記補足する。新学習指導要領総則（P.19）で示されている「基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、観察・実験をし、（後略。）」に『物の温まり方』を当てはめてみると、「鉄の棒の熱の伝わり方はロウなどを塗ってその溶け方を見ることで調べることができることを知り、鉄の棒を実験スタンドのハサミで固定し、一方の端からアルコールランプの炎で熱しながら実験する。」ことと言える。いわば習得型の学習を児童の学習レベルで表現したものと言える。

また、同総則（P.19）の「（前略）、その結果をもとにレポートを作成する、文章や資料を読んだ上で、知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述する（後略。）」を同様に当てはめてみると、前者（レポート作成）は「絵と文によって、鉄の棒の熱の伝わり方をノートにまとめる」ことと言え、後者（まとめて論述する）は「四角い板状の鉄の熱の伝わり方を実験によって調べた上で、いろいろな形の鉄板の一部を熱したときの熱の伝わり方についてレポートにまとめる。」ことと言える。これもいわば活用型の学習を児童の学習レベルで表現したものと言える。

基本的な実験の結果をもとに比較検討しながら自分の考えを持ち、それをもとにレポートを作成する。さらに、四角い板状の鉄板の温まり方の実験観察をもとにいろいろな形の鉄板の熱の伝わり方をレポートにまとめる。

このように単元レベルで見れば、形成的評価の段階での「活用」（活用1）と、総括的評価の段階での「活用」（活用2）があることができる。この考え方も他の教科に当てはめて考えることができるだろう。

4. おわりに

「習得」について言い残すことはないが、「活用」についてはもう一言付け加えたい。それは、「活用」は特別なものでも特殊なものでもなく、日常（毎時間）の学習過程の中にあると考え、単元レベル、本時レベルで指導にあたる教師が見定めたり見極めたりしながら、実際の学習指導を展開することである。

新学習指導要領における情報教育

金沢市立大徳小学校 濱田 美恵子

6月4日、金沢市の教育研究会の視聴覚部会が行われた。今回は、国語科を中心とした情報教育というテーマで、学習指導要領の改訂の重点の一つである言語活動の充実におけるメディア活用についての興味深い内容の学習会となった。講師には、放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター教授 中川一史先生、犀川小学校教諭 西田素子先生を迎え、1時間という短い時間であったが有意義な時間を持つことができた。

1. 授業の中での ICT 活用のポイント

まず、中川先生より、学習の中で、ICTを活用することの4つポイントを提示された。

① 意欲・関心の充実

言葉で表現されたものを、分かりやすく表現することにより、内容がイメージ化され、理解を助けることになる。さらに、集中力を増すことにつながる。

② 知識・理解の補完

デジタルコンテンツや、動画コンテンツなどの活用は、習得した知識を明確にし、理解の補完につながる。

③ 技能の習得

学習者ができたことを、相手に伝えることで、内容を明確にすることにつながる。

④ 思考の深化・拡大

学習する中で考えた内容を可視化したり、学習者同士で共有したりすることが、考えを深め広げていくことにつながる。

その他、対話や交流など協調的なコミュニケーションや議論、説得など主張的なコミュニケーションの充実のためにも、言語活動の充実が不可欠であり、そこでもまた、メディアの活用が有効である。相手に分かりやすく伝え、聞いてもらえるプレゼンテーション、相手を納得させるデジカメでの取材や資料づくり、スピーチ力、相手を引きつけ足を止めて見てもらえるポスター

作り、興味をもってじっくり読んでもらえるようなガイドブック作りなど、国語科でもメディアの活用により種々の活動を設定することができ、言語活動の充実にもつながることが提案された。

2. 国語科における「習得」と「活用」

西田教諭からは、3年生の「ありの行列」の実践より、習得と活用をつなぎ「言語活動」とそれを支える「学習場面での習得と活用」についての提案である。

A：単元全体で習得した力を、設定した言語活動で活用する。

B：学習課程で習得した力を、教材内の学習場面で活用する。

言語活動の設定の場では、行列ができるわけをレポートに書き、交流したり、報告書作りを行ったりする実践が紹介された。また、習得した力の活用の場面では、報告書作りの中で、説明文のスキルを取り入れて作成することで活用を図る等、具体的な内容の報告であった。

指導事項を具現化し、確かな指導で何を習得させるかを明らかにし、そこで学んだことをどのような活動の中でどのように活用させるかを、実践を通じて示唆した興味深い内容であった。

4. まとめ

今回は、若い先生方も多く参加され、中川先生からのストレートな問いかけにも積極的に答える場面も多くあった。ICT活用というテーマについて、これからの実践の中でどのように生かしていくか、私たちへの課題が与えられた学習会であった。

最後に、西田先生からいただいた領域指導事項からの抜粋のプリントは、とても参考になる内容でした。ありがとうございました。

地球ビレッジの住人として

高橋美保

1. はじめに

この原稿に氏名を書いて、現在の私に肩書きがないことに気づきました。1995年から2年間、青年海外協力隊でザンビアに赴任した後、ザンビアで10年余りは教師などをして過ごし、最近の2年ほどは、フィジーでJICA（国際協力機構）ボランティア調整員として働きました。現在は、ひと休み中であるので、所属先がありません。

2. 教育の目的

日本では、基礎学力低下が学校現場の憂いとして叫ばれているようですが、基礎学力向上はゴールではなく、あるゴールにたどり着くための過程であるはずで、地球人としてバランスの取れた感覚を磨き、お互いを認め合って協力し合える手法を培うことをゴールとする教育となることを期待しています。

世界の国々は、私たちが体感している以上に深く関係しているし、まずは、隣にいる人から、隣の国から、「知って関わろう」という姿勢が大切だと思います。

3. 異文化への憧れ

私は、もともと、異なるものへの憧れを強く持っていました。異なる言語、肌の色、文化や習慣…違いは強さとなるという信念の下に、日本人である自分がどこまで受け入れられ、自分自身も異なる世界をどこまで許容できるのか、わくわくする気持ちで、日本を出ました。

4. 国際協力における「違いの受容」

国際協力の現場で働いてきて、一番強く感じるのは、違いに対する許容の重要さです。国際協力は、発展のための技術移転、と図式化されることが多いのですが、「援助」の現場に身を置くと、その当該国に本当に必要なことは何なのかを見極め、そこに向かってどうやって進んでいくかを設定するのは、とても難しく複雑な課題であることを実感します。もちろん、世界

を引っ張っていく立場にある日本も、自分たちの航路が見えて舵取りをしているのか、自国の問題にも立ち返り、きちんと考えていく必要もあります。

異文化社会に飛び込んで、最初の課題は、ありのままの状況を受け入れることです。違いや欠けているところを批判するのは、どんな人にもできますが、状況を受け入れるのは、想像以上に難しいことです。受け入れるというのは、あきらめるのではなく、その事象の背景も含めて観察し納得することです。その上で、異なる文化圏からきた自分が貢献できることはないか、その社会に腰を据えて考えながら、人々の顔を見ながら相談し、試行錯誤しながら、共に進んでいくことが、国際協力であると考えています。決して、進んでいる方が、遅れている方を手助けする、というスタンスではありません。

5. コミュニケーションの基本—喜怒哀楽

国際協力の場でも、実際に物事を進めていくのは、個と個です。お互いの個性と所属する社会を理解し認め合って初めて、良好な関係を築いていくことができます。喜怒哀楽を誠実に伝え合う個々をつなぐコミュニケーションが重要です。もちろん、それぞれの文化的背景によって喜怒哀楽の基準や度合いが違いますが、その場しのぎの取り繕いではなく、自分が感じる喜怒哀楽を、節度を持って示しながら築いていった関係は、何者にも換えがたい財産となり、共同作業を協同作業へと進展させてくれます。

6. これから

日本から外に出て活躍する人たちも多いし、逆に日本で生活する外国からの人たちも増えています。経済の輪、環境の輪を考えても、世界全体が地球ビレッジとして認識されています。

より良い地球ビレッジという社会への実現のため、お互いの違いを許容したうえでの協同作業を進められる人材を地球規模で増やしていきたいですね。

主催: D-project 石川県教育工学研究会
後援: 石川県教育委員会 金沢市教育委員会
協力: エプソン販売株式会社 アップルジャパン株式会社

2009.8.22 (土)
金沢市民芸術村

10:00~10:30
オープニングトーク
10:30~11:30
実践発表
11:30~12:00 13:00~15:30
ワークショップ
15:30~16:30
パネルディスカッション

参加申込 <http://www.d-project2.jp/>

参加費 500円 (資料代)



つくろう！ニホンの教育フューチャー D-project 2 金沢大会 Ver.2

新学習指導要領を視野に入れた活用型授業
～メディアで創造する力の育成を通して～

■9:30～

受付

■10:00～10:30

オープニングトーク



■D-project2 金沢大会 Ver.2

新学習指導要領を視野に入れた活用型授業
～メディアで創造する力の育成を通して～

■D-project とは？ メディアで創造する力とは？ 分からなくても大丈夫。
まず、ここでスタートラインに立ちましょう。

中川 一史 (D-project 会長 放送大学)
小林 祐紀 (大会実行委員長 金沢市立小坂小学校)

■10:30～11:30

実践発表



■実践提案

メディアで創造する力を育む実践提案が8本も！会場のみなさんと徹底的に討論します！

司会 加藤 隆弘 (金沢大学) 清水 和久 (石川県教育センター)

生活科 山岸 朋子 (金沢市立中央小学校)

『見て 見て 聞いて…ぼく・私の大発見！』

算数科 橋田真由美 (金沢市立緑小学校)

『形をしきつめよう』

情報科 江守 恒明 (関西大学)

『砺波郷土資料館をプロデュースしよう』

総合 本岡 朋 (和歌山市立有功東小学校)

『ぶらくり丁の応援 Podcast を作ろう！』

総合 今井 直人 (白山市立無城小学校)

『ぼくらの蕨城小&白山市PR大作戦』

総合 布川かほる (中能登町立鹿西小学校)

『宮崎県の友だちに伝えよう ～わたしたちの学校紹介～』

理科 岩崎 京子 (七尾市立徳田小学校)

『「実感を伴った理解」をめざす理科授業

～理科ねっとわーくの活用を通して～』

国語科 西田 素子 (金沢市立犀川小学校)

『学習過程のプロセスを明確にした書くことの指導

～3年「おもしろいもの、見つけた」の実践から～』

■11:30～12:00

ワークショップ

■13:00～15:30



■ワークショップ

3つのワークショップを通して、「メディアで創造する力を育む」授業の肝について、徹底的に討論します！9月から授業で使えます！

図工ワークショップ

エリック・カールの絵本のように「色」と「形」にこだわりながら、切ったり貼ったり、見たり、見せたり、つくったり…。その繰り返しの中で、感じ考え表現する力が育ってきます。アナログとデジタルとそして仲間との共同作業の中で培われる力について考えましょう。

国語ワークショップ

伝える手段は「はがき新聞」です。「はがき新聞」は手軽に取り組み、相手を確実に意識して編集できるので、何かイベントのあるたびに継続して取り組むと「伝える力」が育ってきます。その「はがき新聞づくり」の学びを考えるWSにしたいと思っています。

Podcast ワークショップ

学校現場でポッドキャストがどのように活用できるのか、どんな学びが広がるのか参加者とイメージを共有しながら、実際にポッドキャストを協同制作します。

■15:30～16:30

パネル
ディスカッション



■パネルディスカッション

パネルディスカッションを通して、「メディアで創造する力」の育成を通して、授業の何が
変わるのか、子どもの何がわるのかなど、パネリストのみなさんの考えを聞きながら、徹
底討論を行います！

コーディネーター パネリスト

中川 一史 八崎 和美 (七尾市立山王小学校)

佐藤 幸江 (横浜市立高田小学校)

指定討論者 清水 和久 (石川県教育センター)

村井万寿夫 (金沢星稜大学)

■17:00～

懇親会

「れんが亭」にて (参加希望の方は、事前に表面記載の参加フォームにて申し込み下さい 参加費 5,000円)

平成21年度 石川県教育工学研究会役員名簿

(順不同 敬称略)

【会 長】 岡部 昌樹 (金沢星稜大)

【副 会 長】 三田村英明 (米丸小学校) ◎村井万寿夫 (金沢星稜大) ◎加藤 隆弘 (金沢大)

【代表理事】 西出 隆 中村 孝雄 紙谷 威 山本 昌猷 清丸 亮一
谷内 敏夫 藤井 昭久 北本 正明 押野 市男 尾小山輝子
大森 俊彦 南 千之

【理 事】 (◎は常任理事)

(加賀地区) ◎荒谷 実 (作見小) ◎吉田 博 (国府小) ◎下出 貴 (分校小)
宇都宮 博 (小松工業)
(金沢地区) ◎西田 政人 (三和小) 菖蒲田英夫 (押野小) 山崎 副 (萩野台小)
中條 敏江 (湊小) 細川都司恵 (金石町小) 山本 秀紀 (小将町中)
晶 一馬 (加賀聖城)
(能登地区) ◎坂井 善久 (小丸山小) 荒巻 雅博 (東部中)

【運 営 委 員】 (○は研究委員)

(加賀地区) 谷口 一登 (犬丸小) 山崎 治 (館野小) 渡辺 直人 (東明小)
晶山 久雄 (錦城養護)
(金 沢) 奥野 豊夫 (米丸小) 中島 満子 (三馬小) 青江 弘義 (西荒屋小)
金岡 弘宣 (金大附小) 坂井 直澄 (犀生中) 濱坂 昌明 (紫錦台中)
端崎 圭一 (金大附属中) 升田 敦士 (兼六中) ○小林 祐紀 (小坂小)
嶋 耕二 (金沢錦丘中) 宮中 和久 (金沢錦丘高) ○中野 淳子 (東明小)
○濱田美恵子 (大徳小) 檜田 豪利 (金大附属高) 島崎 徹 (二水高)
(能登地区) 中西 英一 (羽咋小) 笹川 修栄 (越路小) 山下 匡 (西部小)
前 正人 (鹿島中) ○岩崎 京子 (徳田小) 松本 豊 (高浜小)
山本 英喜 (内灘中) ○八崎 和美 (山王小)

【事 務 局 長】 清水 和久 (県教育センター)

【事務局次長】 ○中條 敏江 (組織担当: 湊小) ○飯田 淳一 (企画担当: 清湖小)
○坂上 則子 (会報担当: 四十万小) ○正來 洋 (web担当: 額小)

【研究部長】 ○細川都司恵 (金石町小)

【研究副部長】 山下 雅美 (金沢教育事務所)

【会 計】 中條 敏江 (湊小学校)

【会計監査】 菖蒲田英夫 (押野小) 奥野 豊夫 (米丸小)

【日本教育工学協会役員】

(研究会理事) 岡部 昌樹

【顧 問】 柳田 勇 山崎 豊 吉田 貞介

【指導委員】 太田 雅夫 小笠原喜康 金子 劭榮 黒上 晴夫 黒田 卓 坂元 昂
堀田 龍也 大野木裕明 水越 敏行 山西 潤一 山極 隆 吉崎 静夫
赤堀 侃司 鈴木 克明 清水 康敬 堀口 秀嗣 中川 一史 稲垣 忠

石川県教育工学研究会 会計報告

平成20年度決算

収入

| 科目 | 本年度予算 | 本年度決算 | 備考 |
|-----|---------|---------|---------------|
| 会費 | 402,000 | 390,000 | 会費3,000円×130人 |
| 補助金 | 400,000 | 400,000 | |
| 雑収入 | 180,000 | 60,000 | 30,000×2社 |
| | 150 | 150 | 銀行利子 |
| 合計 | 982,150 | 850,150 | |

支出

| 科目 | 本年度予算 | 本年度決算 | 備考 | |
|---------|---------|---------|---------|------------------------|
| 補助対象経費 | 謝礼金 | 60,000 | 60,000 | 講演会謝金(講師代) |
| | 旅費 | 210,000 | 200,000 | 全国大会5名 富山大会5名 |
| | 消耗品 | 30,000 | 22,800 | 封筒、DV+テープ、DVD-R、タックシール |
| | 印刷費 | 300,000 | 283,500 | 会報75、76号、研究紀要 |
| | 図書費 | 120,000 | 100,000 | 支部活動費、研究用図書、資料代 |
| | 事務連絡費 | 0 | 0 | |
| | 通信搬上費 | 100,000 | 87,940 | 会報、研究紀要郵送費 |
| 借上費 | 25,000 | 0 | 施設利用謝礼 | |
| 計 | 845,000 | 754,240 | | |
| 補助対象外経費 | 賃借金 | 60,000 | 60,000 | 事務局事務員(村井さん) |
| | 組織加盟金 | 20,150 | 20,120 | 日本教育工学協会会費、送金手数料 |
| | 諸会費 | 51,000 | 8,599 | 諸会合費(大会昼食費) |
| | web維持費 | 6,000 | 6,000 | レンタルサーバー |
| | 計 | 137,150 | 94,719 | |
| 合計 | 982,150 | 848,959 | | |

| | | |
|---------|---------|-------|
| 本年度収入合計 | 本年度支出合計 | 次年度繰越 |
| 850,150 | 848,959 | 1,191 |

平成21年度予算

収入

| 科目 | 予算 | 備考 |
|-----|---------|-------------|
| 会費 | 402,000 | 30,000×134人 |
| 補助金 | 400,000 | |
| 雑収入 | 90,000 | 30,000×3社 |
| | 1,191 | |
| | 150 | |
| 合計 | 893,341 | |

支出

| 科目 | 予算 | 備考 | |
|---------|---------|---------|--------------------|
| 補助対象経費 | 謝礼金 | 60,000 | 講演会謝金(講師代) |
| | 旅費 | 150,000 | 全国大会5名 石川大会 |
| | 消耗品 | 32,221 | 発送用封筒、DVD-R、タックシール |
| | 印刷費 | 300,000 | 会員名簿、会報77、78号、研究紀要 |
| | 図書費 | 120,000 | 支部活動費、研究用図書、資料代 |
| | 事務連絡費 | 0 | |
| | 通信搬上費 | 100,000 | 会報、会員名簿、研究紀要郵送費 |
| 借上費 | 15,000 | | |
| 計 | 777,221 | | |
| 補助対象外経費 | 賃借金 | 60,000 | 事務局事務員(村井さん) |
| | 組織加盟金 | 20,120 | 日本教育工学協会会費、送金手数料 |
| | 諸会費 | 30,000 | 諸会合費 |
| | サーバー維持費 | 6,000 | |
| | 計 | 116,120 | |
| 合計 | 893,341 | | |

平成21年度 石川県教育工学研究会事業計画

| 事業 | 期 日 | 概 要 |
|--------------------|---|--|
| 1 総 会 理 事 会 | 5月31日(日) 22年3月7日(日) | 平成21年度総会（於：金沢市教育プラザ富樫） ・平成20年度事業報告・決算報告 ・平成21年度事業計画・予算案 平成21年度理事会（於：金沢大学） ・平成21年度事業報告・決算中間報告 ・平成22年度事業計画・予算案 ・平成22年度役員案 |
| 2 研究事業 | 5月31日(日) 9:10～ 6月19日(金) 19:00～ 7月12日(日) 16:00～ 7月31日(金) 18:00～ 8月22日(土) 10:00～ 10月 10月30日(金) 31日(土) 22年1月 3月7日(日) | ○講演会・学習会「説明文における言語活動の充実」 会場：金沢市教育プラザ富樫 ○学習会「新しい指導要領の方向性<国語科>」 会場：金沢市教育プラザ富樫 ○学習会「国際交流学習における学ぶ意義」 会場：金沢市教育プラザ富樫 ○学習会「スライドショー作りから学ぶ協同学習の肝」 会場：金沢市星稜大学ピアッツア工房 ○夏の研究会 「新学習指導要領を視野に入れた活用型授業の研究」 会場：金沢市民芸術村 共催：デジタル表現研究会 ○学習会（予定） ○第35回全日本教育工学研究協議会全国大会（茨城県） 会場：つくばカピオ ○学習会（予定） ○平成21年度石川県教育工学研究大会（北陸3県） 会場：金沢大学 |
| 3 刊行事業 | 4月、6月、8月、 10月、12月、3月 7月、3月 3月 | ○研究会ニュース 年間を通じ当会 Web サイト http://i-kougaku.undo.jp/ にてニュースを掲載しています。 ○会報（77号、78号、B5版、24頁、200部） ○第34号研究紀要（A4版、68頁、200部） |

編 集 後 記

会報77号をお届けいたします。
今回の会報では、今年度から登場した若手研についてもみなさまにお伝えすることができました。研究部のさらなる活動や新たな活動については、以下の URL でもご覧いただくことができます。
<http://i-kougaku.undo.jp/>

お忙しい中、原稿を依頼しました先生方、快くお引き受けくださり、ありがとうございました。

【会報担当】

会費納入についてのお願い

研究会の円滑な運営のため、会費納入をお願いいたします。 年額 3,000円

振込先 北國銀行 高尾支店 普通 110292

平成21年 8月12日発行

発行者 石川県教育工学研究会
代表者 岡部 昌樹
事務局 〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学人間社会学域学校教育学類
附属教育実践支援センター
TEL 264-5588 FAX 264-5589
印刷所 (株)小林太一印刷所
TEL 238-5454 FAX 238-5453